『第二言語習得・教育の研究最前線2008年版』発行にあたって

佐々木　嘉則

今年も『言語文化と日本語教育』の 2008 年増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線』シリーズの七冊目をお届けする。今回は3本の投稿論文【稿末注：本号に収録した投稿論文は「動向報告」と「展望論文」の2つの範疇に分け、査読者にもこの類別を念頭においてそれぞれの基準で御審査いただいた。動向報告が「研究の流れや関連する概念・学説を的確に紹介することで新進研究者にとって資料的価値のある有益な文献」という基準を満たすものであるのに対し、展望論文はこれに加えて「未解決の研究課題に対する解答ないし解決策(または有力な手がかり)を新たに提案する、あるいは先行研究の論点を新しい角度からとらえ独自の再整理・総括をする、メタ分析によってこれまで知られていなかった全体像を描き出すなどのオリジナルな貢献が顕著にみられるもの」である。ただし、この区分は研究分野自体の学問的成熟度やレビューの範囲設定など様々な要因に左右されるので、個々の収録論文の絶対的な質や、ましてや執筆者個人の力量に関する格付けを意図したものでは毛頭ない点にご留意いただきたい。条件によっては最初から「動向報告」の枠内に筆先を絞って先行文献の徹底した記述的整理に徹するのも一つの妥当な執筆アプローチであり、むしろその時々でそういった柔軟な戦略決定ができることが研究者としての懐の広さを示すものであると考えられるからである。】に加え、4 本の講演録と質疑応答集1本を収録している。

第1章「談話と語用論」には、牧野成一氏の講演録と大谷麻美氏の論文を収めている。牧野氏の講演(「日本語の談話における数表示「タチ」のシフト」)は、日本語の複数表示表現「タチ」が英語接尾辞-*s* とは異なって共感マーカーの役割を担っていることを様々な用例を挙げて例証している。一貫して機能主義・認知主義的な立場から多年にわたり研究を進めてきた牧野氏の言語観がここでも遺憾なく発揮されているとともに、俳画から古典文学や近現代文学、インターネット上にみえる様々なテキスト、海外の新聞記事、さらには牧野氏自身が実施した作文実験など広範な領域から収集したデータを駆使して進める論議からは、古希を過ぎてなお衰えを知らぬこの碩学の柔軟な思考と感性を学び取ることができる。

一方、大谷氏(「謝罪研究の概観と今後の課題：日本語と英語の対照研究を中心とした考察」)は謝罪の日英対照研究の丹念な整理・総括を通じて、発話行為の普遍性を強調する立場と文化ごとの個別性を強調する立場の対立を浮き彫りにしている。そして、異文化間では謝罪がさらなる誤解と摩擦を生む危険性を指摘したうえで謝罪遂行の文化規定要因と謝罪の結果(効果)を解明する必要を説き、その知見を言語教育や異文化理解教育に応用することにより円滑なコミュニケーションを達成するというシナリオを提案しているのは、まさに字義通りの応用言語学の王道に則った論の進め方といえる。

第2章「言語教育」は池田玲子・原田三千代両氏の講演録(「ピア・レスポンスの現状と今後の課題」)を収録している。本シリーズの第一号に掲載された池田(2002)のレビュー以降の進展(原田氏の博士論文研究を含む)を加え、実に七十余点の文献を引きつつこの分野の動向を紹介するとともに、ピア・レスポンスが教育現場でどのように実践されているのかについても詳しい記述がみられ、研究者と実践家の双方にとって学ぶところの多い文献となっている。

第3章「言語習得と誤用の条件」は奥野由紀子氏の講演録と長谷川朋美氏のレビューを収めた。このうち奥野氏(「第二言語習得過程における言語転移の認証を求めて：名詞修飾における「の」を中心に」)は自身の博士論文(2002 年度提出)研究をふまえ、中国人日本語学習者が犯しやすいとされている

「あかいの花」などの誤用が母語からの転移なのか、あるいは日本語学習者に普遍的にみられる現象なのかをどうやったら判定できるか、方法論的な見地から論考を加えている。とりあげている文法事象自体は一見狭い範囲に限定されているように見えて、実はその根底にある「転移の認定をどのように行なうか」という習得論全般に関わる重要な論題の解決を目指した研究であり、山内博之氏(2006: 111)は「今後、言語転移研究が行なわれる際には、奥野氏が提唱した認証方法は、必ず、顧みられなければならない」「本書によって成し遂げられた奥野氏の業績は非常に大きなものではある」と評している。また奥野氏は「博士論文研究にどのように取り組んだかを若手研究者の前で語っていただきたい」という主催者側からの要望に応じ、講演の冒頭で在外中の体験や大学院での教員とのやりとりを交えつつ、研究の方向づけの過程を紹介している。こういった情報は完成品の研究論文からは窺い知れないが、学術研究の背景を理解する上で、学生のみならず指導教員にとっても示唆に富むものといえよう。

一方、長谷川朋美氏(「第二言語習得における臨界期仮説・年齢要因：日本語を対象とした研究に向けて」)は「言語習得における臨界期の存否」というこれまた習得論の重要論題に関する知見を手際よく整理したうえ、日本語習得における臨界期の検証の現況と今後の展開を展望した論考である。長谷川氏も七十余点という膨大な文献を参照しているが、その中でも既存の年齢要因研究の多くは欧米言語(特に英語)の習得に関わるものであり、日本語を対象とした研究は長谷川氏の博士論文を含め数件を数えるのみである。年齢の影響のあらわれ方が目標言語の特性や母語との距離によって異なる可能性を考えると様々な言語を対象としてその検証を行うことが不可欠であり、本稿はその前提となる共通理解を確認するという意味でも重要な意味を持っている。なお長谷川氏の論文は、ハワイ大学マノア校(Department of Second Language Studies)在学中、博士論文研究に本格的に着手する手前の関門となるcomprehensive examination の課題論文として執筆した草稿をもとに、さらに再構成・拡充したものである。そういった観点からみると、北米英語圏のトップクラスの応用言語学系博士課程の要求水準を推し量る一つの資料でもある。

第4章「言語習得研究の理論と技法」は大北葉子氏の講演録および張文麗氏のレビュー論文に、佐々木嘉則の質疑応答集を加えた。大北氏(「脳科学と言語研究：言語活動は複雑で分からないことばかり」)は近年注目を集めている脳科学的方法による言語研究の流れを概観し、次いで大北氏自身が進めている文字処理研究の成果を紹介している。平易な語り口と豊富な図版に助けられ、いわゆる「文系頭」の応用言語学研究者にも理解しやすい脳科学的研究方法の解説となっているのみならず、設備や予算規模などについても具体的な情報が随所で提供されている。さらに、ずらりと並んだ数式や脳の部位の名称などの術語に幻惑されず、その根底にあるロジックの当否を冷静に吟味する必要性を教えてくれているという点でも、これからこの分野の文献に挑むことを目指す若手研究者には必読の文献といえる。

これに対し、張氏のレビュー(「プロトコル分析は何を明らかにしたか：習得メカニズムを探る研究の概観から」)は、第一言語話者を対象とする認知心理学的研究でしばしば用いられる手法である内省プロトコルを第二言語研究に援用するうえでの問題点ならびに、プロトコル分析が習得メカニズムの解明に貢献できる可能性を詳細に論じた論考である。大掛かりな設備や高度な数学的知識を必要とする脳科学的研究法に比べると、一見とっつきやすそうな印象を与える内省プロトコル手法ではあるが、実はこういった質的研究法こそ厳密な方法論的省察なくしては妥当な結果解釈ができないことが、張氏の論考から学び取れる教訓といえよう。もちろんそういった議論は認知心理学者の間でも交わされているが、張氏はその論点整理に加え「発話を母語と目標言語のいずれでさせるべきか」という、非母語話者を対象とする研究に固有の方法選択についても論考を進めている。

最後の拙稿(「今さら訊けない新 M1のための、第二言語習得再入門」)は、佐々木が第二言語習得の概論や演習授業、あるいは学位論文指導を担当した経験から、「初学者にはここが紛らわしい」「ここをクリアできないと研究計画立案や論文執筆の段階で躓く」等と感じた難所を中心に、問答集形式で説明を加えたものである。実はここで取り上げた項目の中には、佐々木自身が修士課程の初年時あるいはそれ以前から抱いていながら、なかなか解消する機会が得られず長きにわたって不全感を感じ続けていた疑問が数多く含まれている。同じような疑問を抱

いている読者の御参考になれば幸いである。

なお、本シリーズ刊行にあたって助成を受けている文部科学省科学研究費補助金【稿末注：「第二言語としての日本語習得・教育に関する研究のレビュー」基盤研究(C)2005～2008 年度　課題番号 17520343　研究代表者　佐々木嘉則】は 2008 年度で最終年を迎えた。これまで二期七カ年におよぶ長期プロジェクトを大過なく完遂できたのは、ひとえに様々な形で御支援くださった多くの方々のおかげである。2009 年以降のプロジェクトの展開については、方向が見え次第ホームページ等でお知らせしたいと思う。

追記

既刊号の目次や要旨などの情報は以下のサイトで公開している。前回の科研報告書(2002～2004 年度)もここからダウンロードできる。今後も随時更新を進める予定であるので、折に触れてアクセスしていただきたい。

『第二言語習得・教育の研究最前線』ホームページ
http://jsl2.li.ocha.ac.jp/saizensen/

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった 11 名の査読協力者の先生方、企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘・徳永あかね・長友和彦の各氏に深く御礼申し上げる。秋山光文氏には著作権処理に関して貴重な助言をいただいた。編集事務局実行委員の石崎晶子氏・張瑜珊氏には装丁企画・書式点検・校正などの実務に御活躍いただいた。寺沢久美子・唐澤麻里・清水寿子・田川真央の四氏には、発行作業にあたって御協力を仰いだ。田川氏にはあわせて、経理・発送事務等の元締めとしてもこのプロジェクトを背後から支えていただいている。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社の渡辺唯広氏と、今回も厳しいスケジュールの中、迅速に印刷製本作業を進めてくださった平河工業社の海東智紀氏にも感謝申し上げたい。

参照文献

池田玲子 (2002)「第二言語教育でのピア・レスポンス研究：ESL から日本語教育に向けて」お茶の水女子大学日本言語文化学研究会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線　2002 年版』(『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号) 289-310.

山内博之 (2006)【書評論文】「奥野由紀子著『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』」『第二言語としての日本語の習得研究』9, 104-114.

ささき　よしのり／お茶の水女子大学